

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 10 月 6 日現在

機関番号：64303

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26883011

研究課題名(和文) 開発途上国におけるツーリズム振興の担い手となる住民組織の研究

研究課題名(英文) Community organisations can be leaders in tourism activity?

研究代表者

關野 伸之 (Sekino, Nobuyuki)

総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト研究員

研究者番号：40730180

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はツーリズム産業の進出により、若者の都市流出と農地の喪失が起きているバリ島北部サバ川流域を対象とし、住民主体の水利組織スバクの調整機能を明らかにするとともに、開発途上国の実情に即したコミュニティ主体型ツーリズムのあり方を提起するものである。

本研究により(1)スバクはツーリズム開発に対し、何ら意見をはさむ権限をもっていないこと(2)ツーリズム開発により構成員の数が減少し、構成員が規則を遵守しなくなってきていること(3)ツーリズム産業以外の経済活動もまたスバクの公平な水分配を阻害していることが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This research identifies the function of subak (traditional water association in Bali) in Saba River basin of North Bali where outflow of young people and loss of farmland are happening by a big flow of tourism. We also suggest a way of community-based tourism in which the residents earn income as land managers, entrepreneurs, service and produce providers, and employees.

We concluded that subak is facing a crisis of solidarity because of rapid tourism development, decreasing number of members and other actor's activities.

研究分野：社会学

キーワード：水資源管理 紛争 ツーリズム

1. 研究開始当初の背景

対外債務に苦しむ開発途上国において、ツーリズムは貴重な外貨獲得手段であり、失業率を減少させる経済問題の万能薬として考えられてきた。1990年代以降、社会学者、環境保全主義者、開発実践者、先住民権利保護活動家の間でツーリズムは肯定的な評価を受けていた。成長を続けるツーリズム企業が、その真の目的が利益追求であったとしても、環境や先住民を尊重したからであり、エコツーリズムは1990年代における環境分野の最もホットな流行語のひとつとなった。

その一方、ツーリズムは麻薬や売春など数々の社会問題を地域にもたらすとともに、汚染や環境破壊を生み出す要因ともなっている。ツーリズムによって新たな挑戦、失われた文化や風習の掘り起こしもおこりうるが、金銭に対する執着が日常化し、ツーリズム収入への過度な依存によって、人びとの関係がコミュニティや家族主体からビジネスや階層構造主体に変化することが指摘されている (Stronza and Gordillo 2008: 459)。

自然と文化が調和したコミュニティとしてツーリズム開発においても注目を浴びてきたのが、インドネシア・バリ島の水利組織スバックである。その機能は水路の建設から維持管理および修復、農事暦や農薬の規制、紛争調停、水や稲作に関連した儀式的執行と、広範囲に及ぶ。ゴトン・ロヨン (*gotong royong*) と呼ばれる構成員間の相互扶助によって田植えや収穫を行い、違反行為には罰則を科すなど、その運営は構成員である農民たちによって自主的に行われている。水の支配・官僚機構とは異なることから、文化人類学者クリフォード・ギアツ (Geertz 1980) は、社会的には成層化し空間的には分散し行政的には非集中的で精神的には強制力を持った「灌漑社会」と表現した。くわえて、スバックは宗教と精神 (*parhyangan*)、人間

社会 (*pawongan*)、自然環境 (*palemahan*) の三者の調和を重視するバリ・ヒンドゥー哲学、在来知である「トリ・ヒタ・カラナ (*Tri Hita Karana*)」を体現したものと評される。いわば、地域資源マネジメントのアイコン (Roth 2014) であり、2012年には「トリ・ヒタ・カラナの哲学を表現したスバック・システム」として世界遺産に登録された。しかしながら、近年、スバックに対し過剰な期待をよせることへの疑問の声があがるようになった。生態人類学のジャーナル "Human Ecology" の論文執筆者たちは「在来の生態的な知」というスバックの一般化や理想化を危惧し、完全に民主的で、水資源に対し自由で平等なアクセスはバリには存在しなかった (Roth 2014) と主張した。

2. 研究の目的

はたして伝統的な民主的組織として知られてきたスバックは地域資源マネジメントの担い手として現在も機能しているのだら

うか。

本研究では、ツーリズム産業の進出により、若者の都市流出と農地の喪失が起きているバリ島北部サバ川流域を対象とし、水田の売買にともなう土地の権利紛争や水をめぐる争いに着目し、住民主体の水利組織であるスバックの調停機能を明らかにするとともに、コミュニティの内的変化に対応してきたスバックがツーリズムという外的な変化に対応しうるのか、その可能性を検討する。地域社会で培われてきた土着組織の相互調整機能が、ヨーロッパ的民主主義を前提としない開発途上国の実情に即したコミュニティ主体型ツーリズムを提言することを最終目標とする。

3. 研究の方法

本研究では、ツーリズム産業の進出が著しいサバ川流域について、ポゴール農科大学およびウダヤナ大学の協力を得ながら、会議や儀礼などの参与観察および聞き取り調査によってスバックの実態把握をおこなう。同時に文献調査を実施し、調査対象地域の特異性を抽出した。

GPS を使い、サバ川流域の宿泊施設や売却予定の農地について空間分析をおこなった。各宿泊施設について聞き取り調査を実施し、スバックとの関係を明らかにした。

また、水利組合スバックの構成員の属性など社会的位置づけを聞き取り調査や会議などの参与観察をつうじて分析する。とりわけ、スバック内部の調停能力と外部に対するスバックの調停能力に着目した。

土地をめぐる問題について、スバックで管理されている土地台帳の精査、行政機関及び農家、実際に農地を購入したツーリズム事業者への聞き取り調査をおこなった。

4. 研究成果

調査の結果、以下のことが明らかになった。

(1) スバックの実態

サバ川流域には2015年末で56の水田スバックが存在する。山間部では水田が少ないことから5ha程度のもので、平野部の100ha近い耕作面積をもつものまで規模はさまざまである。平野部のスバックではおよそ8割の農民が小作人であり、土地持ち農民は少ない。一人あたりの耕作面積はおよそ0.6haで1ha以上の水田をもつ農民はきわめて少ない。土地所有者は企業家も多く、自分では農作業をせず、スバックにかかわる活動も小作人に委ねる場合が大半である。したがって、異なるスバックの水田で農作業をする小作人は、二つ以上のスバックに加入することになる。

伝統的水利組織とされるスバックであるが、平野部では観光開発や新興住宅地の建設により、構成員は大きく変化している。現在のスバックには正構成員 (*kerama pengaya*) と準構成員 (*kerama penganmpel* もしくは *kerama pengohot*) のカテゴリが存在する。

正構成員は土地のあるなしにかかわらず、農地面積に応じた水利費を支払い、スバック寺院で執り行われる儀式に参加するなど共同作業に奉仕する。参加しなかった場合には規則に基づき罰金が科される。一方、準構成員は水利費のみを支払う人びとである。かつては農地であった場所が開発によりホテルや高級別荘地、あるいは住宅と農地以外のものに変わった場合にその所有者は所有する農地面積に応じた水利費を支払う。共同作業の義務はないが、農地購入者がバリ人であれば寺院で行われる儀式には参加する人が多い。所有者が外国人である場合は準構成員とならないが、重要な儀式がある場合にはスバック長名による要望書に基づき寄付をする。

農民ではない準構成員が増えることで、それを統括するスバックの意味合いが変わって切ることが判明した。スバック長は原則として土地をもつ農民に限られる。このため、多くのスバックではなり手が不足し、規則上は構成員による選挙によって選出されるものの、前任のスバック長が引き続き合議によって選ばれていた。スバックに対する関心が高まり、伝統文化を体現するものとして観光要素としても売り出したい州政府は、それまで無給であったスバック長に給与を支給するようになった。しかし、多くのスバック長は仕事内容に対し報酬が十分であるとは認識しておらず、むしろできることなら辞めたいと考えている人も多かった。

(2) スバック構成員に対する調停能力

というのも、規則に従わない農民が増えてきているのである。罰金による制裁はあるものの金額が小さく、内部規制が働かなくなってきた。くわえて、観光開発や新興住宅地により、水田面積が減少し、構成員の数が減っており、スバック長は構成員に強い勧告ができない状況にある。たとえば、大型ホテルとレジャー施設が建設されたスバックでは5人の小作人が働いていたが、構成員でなくなったため、スバック長は彼らの消息についてまったく情報をもっていなかった。スバックの構成員数が減れば、共同作業の一人あたりの負担も大きくなる。さらに、スバック長は水田がホテルに売却されるまで、その事実を知らされていなかった。農地の売買は所有者と買い手が不動産登記官の立ち合いのもと実施され、スバックは農地改変に対し何ら権限をもっていないことが判明した。

スバック構成員の共同作業に対するモチベーションの低下は著しい。参与観察を行ったスバックの水路の共同清掃作業では、農民はそれぞれ用具をもち水路にたまったごみを掻き出し、下草を刈っていたが、老人たちは開始と同時に座り込み世間話をはじめた。それにつられ、多くの参加者がさぼりはじめ、作業は30分もしないうちに終了した。スバック長によれば、このスバックは上流部と下流部にそれぞれ位置する二つのサブスバックで構成されているが、上流のサブスバック

の農民にとっては下流にゴミがたまっていても不利益をこうむらないことから参加者のモチベーションはあがらないのだという。

(3) 外部者とスバック

前述のとおり、スバックはツーリズム開発について、何ら意見を述べる機会はない。水路を利用するツーリズム事業者に対し、儀礼などを行う際に寄付金を募る要望書を提出する程度であった。

ツーリズム開発だけでなく、採石事業者など外部のアクターに対するスバックの権限も弱い。バリ州政府が食糧自給率向上のため、サバ川流域に水田を増やすことを目的に1991年に建設された水路は、その目的を達成することはなかった。採石場による土砂が水路に流れ込み、水の流れを阻害しているからである。あるスバックではスバック会議において、採石場の行為を非難し抗議活動を行うと宣言していたが、実施されることはなかった。堆積する土砂の撤去作業はスバック構成員の寄付によって行われた。というのも、バリ州政府は水路の修繕は認められるが、土砂の撤去には予算を充てることはできないのだという。現在、堆積する土砂は多いところで1mを超え、費用も莫大なものとなっている。

また、水路を農業用水ではなく生活用水として利用している村人の行動も問題となっている。農民以外の村人は水路をゴミ捨て場としても利用しており、土砂とあいまって水の流れを阻害していた。

こうした行為に対し、水にかかわるアクターが集い、サバ川流域の将来を考えるステークホルダー会議が開催されたが、ツーリズム開発事業者や採石事業者、村人といったスバックの活動に大きな影響を与えているアクターが参集されることはなく、問題の解決には程遠い状況にある。

スバックがツーリズムの担い手として機能するためには、こうした外部アクターに対し何らかの意見を表明する機会や権利をもたせることがもっとも重要と考える。さまざまなアクターが同じテーブルを囲んで話し合う民主的統合の実現がコミュニティ・ベース・ツーリズムには不可欠である。これまで得た成果をもとに、今後は現地のウダヤナ大学や各省庁と協力し、スバック以外のさまざまなアクターが参加し地域の将来を語り合うステークホルダー会議を開催し議論することで、ツーリズム開発の新たなかたちを提示したい。

(4) サバ川流域のスバックの特殊性

村の古老への聞き取りから、サバ川流域では1917年に起きたバリ大地震を契機として周辺地域からの移住が進み、1963年のアグン山噴火によって逃れてきたバリ東部のカランアセムの農民によって、農地が開かれていった歴史がわかってきた。過去の文献で描かれてきたバリ南部のスバックとは歴史経緯が異なるため、サバ川流域のスバックは必

ずしも一般的なスバックとはいえないことに注意が必要である。

引用文献

Geertz, C. (1980) Negara: the Theatre State in Nineteenth-century Bali, Princeton University Press. (=1990, 小泉潤二訳『ヌガラ 一九世紀バリの劇場国家』みすず書房)

Roth, D. (2014) Environmental sustainability and legal plurality in irrigation: the Balinese subak. Current Opinion in Environmental Sustainability 11: 1-9.

Stronza, Amanda and Javier Gordillo (2008) "Community views of ecotourism", Annals of Tourism Research 35(2): 448-468.

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

I Wayan Budiasa, Budi Indra Setiwan, Hisaaki Kato, Nobuyuki Sekino, Junpei Kubota (2015) The role of Suba system and tourism on land use changes within Saba watershed, Northern Bali, Indonesia Journal of ISSAAS (International Society for Southeast Asian Agricultural Sciences) 21(2):31-47 査読有

〔学会発表〕(計2件)

關野伸之 統合的水資源管理の課題 - インドネシア・バリ島の水利組合スバックの事例から 環境社会学会大会 2014年12月14日 龍谷大学

大倉芙美 加藤亮 關野伸之 イ・ワヤン・ブディアサ 市川潤 参加型水管理(PIM)の普及と定着を目指したサービス比較モデルの開発と検証 - バリ島の水利組合(スバック)を事例として 2015年9月1-4日 岡山大学

〔図書〕(計1件)

關野伸之 他、勉強出版、水を分かち - 地域の未来可能性の共創、2016、326

〔産業財産権〕

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

關野 伸之 (SEKINO, Nobuyuki)
総合地球環境学研究所・研究部・プロジェクト研究員
研究者番号：40730180

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：

(4) 研究協力者

大倉芙美 (OKURA, Fumi)
東京農工大学・農学研究院・博士課程